

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 万葉集の恋と語りの文芸史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大谷, 歩, Otani, Ayumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002422">https://doi.org/10.57529/00002422</a>

## 題目 「万葉集の恋と語りの文芸史」

國學院大學大学院 文学研究科文学専攻 大谷 歩

本論文は「万葉集の恋と語りの文芸史」と題し、『万葉集』の恋歌とその歌にまつわる語りの形成を、文芸史という方法によって把握することを目的とするものである。ここで『万葉集』の恋にまつわる作品を取り上げるのは、『万葉集』に大量に存在する恋歌の中でも、男女の愛の悲劇にまつわる歌と物語りが伝えられることの意味と、それらがいかにして作品として形成されたのかという問題意識によるためである。そのために、本論では〈古物語り〉から〈今物語り〉へという語りの系譜を想定し、その史的展開と、個々の作品にあらわれる特徴的な語彙を手がかりとして、古代における男女の愛の獲得の歴史を論じるものである。ここで「文芸史」と呼ぶのは、「文芸学」（具体的な作品を体系的に追求する学的方法）に依拠するもので、それは一つの作品としてのテキストの形成の歴史と、同時にそのテキストに内在する〈表現〉の形成の歴史を追究する方法である。その具体的方法は、一、神々の愛の歌と物語りが人の世へ移行する際に生じた愛の悲劇の歴史に視点を向け、それを文芸史の方法によって追求すること、二、人間を主人公として展開する、男女の愛の成就や挫折の物語りの歴史に見出される特殊な用語に注目し、文芸史の方法から追求することにある。殊のほか、本論で扱う中心的課題は『万葉集』における人間の愛の獲得の問題である。この考察のために、本論では第一部に「詞から歌へ」として、真間の手児名などの伝説の女性の悲劇の死や、自らの意志で愛を貫こうとした但馬皇女の歌、罪を得てもなお采女を係念する安貴王の愛への執着などを通じて、『万葉集』における男女の愛を一つの歴史（文芸史）として把握するものである。この時、本論では〈古物語り〉と〈今物語り〉という視点から、各作品の性格分類を行う。〈古物語り〉とは、真間手児名などに代表されるように、古くから語り継がれてきたという、いわゆる伝説歌と呼ばれるもの、また軽兄妹の恋物語りや、記紀万葉に伝えられる磐姫皇后の歌や物語りなど、『万葉集』の成立する遙か以前から伝えられ、ある型を持ちながら恋歌や恋物語りの基盤を形成してきた歌と物語りを指す。〈今物語り〉とは、〈古物語り〉の型を継承しながら、近い世の實在の人物を主人公とすることで、その作品に現実性や迫真性を持つことを特徴とする歌と物語りを指す。『万葉集』の多くの恋物語りは〈今物語り〉として成立しているものと考えられ、初期万葉においては〈古物語り〉から〈今物語り〉への過渡的状况を見て取ることができる作品が存する。第一部では、〈古物語り〉の再生と継承の方法にはじまり、〈古物語り〉から〈今物語り〉への展開、さらに〈今物語り〉の成立を、人間の愛の獲得という視点から論じる。第二部は「由縁有る歌の形成」として、巻十六の〈由縁〉を持つ作品を中心に、物語りに用いられる伝典語などの特殊な用語に注目しながら、男女の愛がいかにして特殊な用語と呼応しつつ、物語りとして形成されたのかを論じるものである。もちろん、これらの作品も第一部と同じく〈古物語り〉から〈今物語り〉へという系譜の中に位置付けられるものであり、その性格分類は歌にまつわる〈由縁〉によって示されて

いると考えられる。この〈由縁〉の語は、卷十六の目録及び標題にみえる語であり、本来的には卷十六の諸作品をのみ指す言葉であるが、本論における〈由縁〉が示す範囲は、題詞や左注によって示される歌の状況、作歌契機、その歌が伝えられた由緒(故事)など、物語りとしての性格を有する歌にまつわる語りを指す。そしてこの〈由縁〉は、〈古物語り〉と〈今物語り〉という概念を『万葉集』の用語に即して具体的に示す言葉であると考ええる。本論の主眼は、いわば文芸史を経糸とし、仏典語などの特殊な用語を緯糸とし、古代の男女の恋歌と語りの文芸の歴史を明らかにすることにある。以下、各章の概要を示す。

《第一部》「詞から歌へ」

第一章「真間手児名伝説歌の形成——『過』と『詠』の方法を通して——」は、真間手児名の伝説歌について、山部赤人歌(卷三・四三—三三)と高橋虫麻呂歌(卷九・一八〇—七)〇八の題詞の違いに注目し、その作歌手法の違いを論じた。赤人は、「墓を過る」という方法で、旅の途次に立ち寄った手児名の「墓」に寄せて、娘子の悲劇を追想しながらも、自らの感懐を詠むことを主題としていた。一方の虫麻呂歌は、題詞に「詠」とあり、それは『文選』にみられる「詠史」の方法により導かれた可能性が考えられる。「詠史」は中国詩において過去の人物の人生や歴史を詩に託すものであり、そこには伝説上の人物も含まれる。虫麻呂の手児名の歌が「詠」であるのは、娘子の容姿や人生を詳細に描写するという「詠物」の方法に重なりながら、伝説の人物である娘子の人生を現実存在した歴史として描くことが意図されているためであるといえる。それは娘子の存在とその悲劇の歴史的証拠である「墓」を起点として展開することから、虫麻呂歌は「詠物」の方法よりもむしろ「詠史」の方法を強く意識した、悲劇の娘子の歴史語りであったといえる。今に生きる者の評価を抱え込みながら再生されることこそが、〈古物語り〉を今へと立ち上げさせる方法であった。

第二章「大津皇子伝と大伯皇女の相聞歌——〈内乱〉をめぐる〈今物語り〉の形成——」は、上代文獻における〈大津皇子伝〉の存在を検討し、その中における姉大伯皇女の相聞歌二首も、〈大津皇子伝〉へ参画した重要な作品であることを位置付け、〈今物語り〉としての〈大津皇子伝〉の形成を考察するものである。大津皇子に関する文獻は『日本書紀』『懷風藻』『万葉集』にみられ、これらの文獻から読み取れる〈大津皇子伝〉は、重なり合いながらも異なる物語りを伝えている。そのような中で、大伯皇女は唯一の肉親としての姉という立場でこの〈大津皇子伝〉に参画している。その姉と弟という関係を、題詞「竊」の字から近親相姦として理解する説があるが、この「竊下」の語は、軽太子の〈古物語り〉における〈密通〉から〈内乱〉へという型の〈内乱〉へ向かうことを暗示する語として理解すべきものであり、ここに姉弟の密通を直接的にみることは適当ではない。皇女の二首の歌は、「竊下」の暗示する〈内乱〉への予感に対する恐れ的心情が底流しており、大伯皇女の相聞歌二首は、弟の運命を思う姉の不安や予感が読み取れ、その予感をもって以後に続く〈大津皇子伝〉に参画した歌であったことが想定されるのである。

第三章「朝川を渡る女——但馬皇女をめぐる恋物語りの形成——」は、但馬皇女相聞歌三首(卷二・一一四—一六)が〈古物語り〉から〈今物語り〉へと展開する過渡的狀況を示す作品として取り上げ、但馬皇女の恋物語りの形成を考察するものである。但馬皇女の三首は多くの類句・類想歌を持ちながら〈類型〉の中に成立している状況がうかがえ、その多くが卷二・相聞部の冒頭に載る磐姫皇后の歌と、その或本歌として載る軽太郎女の歌を〈引

用〕する態度にみられる。但馬皇女の恋物語りは、一人の男性を激しく思うがゆえに悲劇の恋へと向かうという道筋が、〈古物語り〉の枠組みによって示されているのである。ただし、一一六番歌の「朝川渡る」においては、唯一この〈類型〉〈引用〉に基づく〈古物語り〉の型から逸脱しているものであり、皇女が「朝川渡る」とうたうことによって、当該作品は但馬皇女の個人的経験（今を起源とする話）へと収斂されることで〈今物語り〉としての性格を持ち得たのである。男が女のもとから帰る夜明けの時間に、女が夜明けの川を渡るといふのは、世間の時間に逆行する異常な行動であり、この世間の時間を逸脱する皇女の行動からは、二度と日常へ回帰することが不可能であることが予想される。但馬皇女の恋の悲劇への予感、まさに男と女の時間を異にする異常な「朝川渡る」という表現において決定されて行くのだと考えられる。三首の作品が皇女の恋の根源であるという理解から、その死をも含み込んで皇女の〈今物語り〉が形成され、『万葉集』に伝えられるに至ったと考えられる。

第四章 「『係念』の恋——安貴王作歌と左注の位置付け——」は、安貴王が八上采女を娶ったことにより、勅断によつて不敬の罪を得て、別離させられた時に王が詠んだという歌（巻四・五三四—三五）の左注にみえる仏典語「係念」が、安貴王の恋の様相をより具体的に描き出していることを論じた。当該の「係念」の第一の理解は〈仏への専心〉から〈采女への専心〉へという、罪なる専心へと向かうことであり、第二は「係念」することによる〈色欲への迷いの戒め〉から〈采女への迷い〉へと向かうことで、王の罪の深さと采女への愛情の深さが重ねられているといえる。そのような常軌を逸した愛情こそが、当該の「係念」の語により説明されたのであり、安貴王歌も、采女へ向けた「一心係念」の愛情としてうたわれていることが理解されるのである。当該作品は、男女の恋を戒める仏教との対立においてこそ見出された、男女の愛情を眞の価値とする人間の姿を描き出した〈今物語り〉として位置付けられるのである。

第五章 「嫉妬と怨情——古代日中文学の愛情詩と主題の形成——」は、古代中国の愛情詩における〈棄婦〉から〈怨情〉へという主題の展開と、古代日本の〈嫉妬〉をめぐる歌と物語りを比較研究の方法によつて考察したものである。古代日本の男女の関係は、妻問い婚にみるように恋人関係と夫婦関係が曖昧であり、古代中国のように夫婦関係を前提として成立する愛情詩とはその事情が異なるものである。しかし、明確に制度化された夫婦関係の中で成立する中国愛情詩と突き合わせることによつて、古代日本の男女の恋の在り方や特徴が浮き彫りになる場合があるように思われる。本論はその一端として、主題論を軸として考察したものである。

#### 《第二部》「由縁有る歌と語りの形成」

第一章 「桜児・縷児をめぐる歌と語り」は、桜児（三七八—八七）と縷児（三七八—八九）の作品における彼女たちの死の理由と、彼女たちの悲劇の死を悼む男たちの歌の成立について論じた。当該二作品は、複数の男性から求婚されて死を選ぶ女性の物語りであり、それは神の妻の時代から人間の時代へと移行する段階にあらわれた悲劇の〈古物語り〉であった。『万葉集』にあらわれる恋や結婚は、「社会や世間の習慣を守り、親族から認知されて結婚へと進むのを一般として、**Ⅱ**親からも世間からも認知されず、一人の女としてひそかな結婚（自由婚）へと進むもの、という二つの系統を見出すことができる。」の系統は、親や共同体の社会的制約や慣習に則つて結婚し、社会的に生きることを望む女性であ

り、㊦の系統は、個人の意思で行動し、自由な恋愛や結婚を求め、社会からは逸脱し、社会への回帰が困難な状況に置かれる女性であるが、この㊦の系統の女性は、結果的に不幸な運命が待っていることが予想されるのである。桜児・縵児は「の系統に属する女性たちであり、複数の男から求婚され、男たちが死闘を繰り広げるといふ事態に陥ったことは、彼女たちの望むところではなかったが、彼女たちの意に反して、世間からは男や世間を惑わす淫らな女という批判を受けることになる。彼女たちは、結果的に彼女たちの属する社会が求める秩序を乱したことになる、自らが望む生き方と現実との落差に激しく絶望し、㊦の系統に属する女性であるとみなされることへの懼れによって、自ら死を選んだのだといえる。彼女たちの死は、美しい女性は本来神の側に属すものであったが、それが人間の側に属すことによつて生まれた悲劇であったのである。桜児・縵児は、桜と縵の美しさによつて名付けられ、またそれは桜と縵がなぜ儂く美しいかの理由を語る起源譚として、この悲劇の物語りが生成されたのだと考えられる。当該作品は、この二重の〈由縁〉を持つ歌として成立したと考えられるのである。

第二章 「小泊瀬山をめぐる歌と語り——その流伝的性格の形成について——」は、『常陸国風土記』（新治郡）と巻十六・三八〇六番歌とにみられる「小泊瀬山の石城」の歌をめぐって、類似する歌でありながら異なる物語りを持つて成立する歌と、その歌の流伝的性格について考察した。『常陸国風土記』の歌は、葦穂山の古老伝承の中の「俗」の歌として伝えられており、その伝承には油置売命という山賊に関わつて、今も社の中に「石屋」があるという。この油置売命は山賊であるとされることから、おそらくは朝廷の討伐の対象となったものと思われ、彼女の拠点とした「石屋」を通行する人々の間で、彼女の荒ぶる魂を鎮めるための歌としてうたわれたのが、当該の歌であったと考えられる。そしてこの「石屋」を通る際には、油置売命の魂を鎮め、通路を無事に通過できるようにという手向けの歌として、村人や旅人の間に広まったものと推測されるのであり、古老伝承はなぜこの場所でこの歌をうたうのかという〈由縁〉を伝えているものと考えられるのである。歌の「石城」はこの「石屋」との結びつきによつて選び取られたものと思われ、「小泊瀬山の石城」とは、世間から逃避する男女が隠れる場所として流伝していた成語であったと推測される。一方、巻十六の歌は男との恋を遂げようとする女の決意の歌であり、「小泊瀬山の石城」に共に隠れることは、男とのかけおちや情死をも辞さない女の強い覚悟に発している。このことから、「小泊瀬山の石城」は避難所、あるいは墓のいずれにおいても理解は可能である。ただし、それは歌表現における比喩であり、危険な恋に落ちた男女がゆく場所という、隠語ともいふべき成語として理解できるのである。「小泊瀬山の石城」とは、そうした歌の流伝性の中に存在したのである。巻十六の歌は、「竊」なる恋の〈古物語り〉の型を持ちながら、男との恋を成就させようと決意した女の〈由縁〉ある歌として形成されたのであり、「小泊瀬山の石城」はその象徴的な恋歌の成語として位置付けられるのである。

第三章 「怨恨歌の形成——〈棄婦〉という主題をめぐって——」は、巻十六の棄てられる女の物語りと怨恨の歌二首（三八〇九・三八一〇）をめぐって、中国詩の〈棄婦〉と〈怨恨〉という主題を通して作品の成立を考察した。〈怨恨〉という主題は、『玉台新詠』の怨詩や閨怨詩に多くみられ、そこには待つ女の嘆きを詠むという型が存在した。女が男を待つということとは、その胸中に男がもう訪れないかもしれないという不安や疑念と、必ず尋ね

てくるに違いないという期待があり、その葛藤の中で歌の表現が獲得されている。それは、不安と期待の中で揺れ動く繊細な女心の表白であり、閨で男を待ち続ける折の閨情が哀切の情として理解され、主題化されたものと考えられる。それは『万葉集』の坂上郎女の「怨恨の歌」（巻四・六一九―二〇）にもみられるものであり、『玉台新詠』の「怨」「閨怨」に等しい閨の嘆きとしての〈怨恨〉という主題が獲得されたのである。この〈怨恨〉という主題は、中国六朝の愛情詩においては〈棄婦〉の悲しみを抱え込んで成立している状況が認められ、〈棄婦〉を内実とする〈怨恨〉という主題は、夫に棄てられたことが明確になり、棄てられたことへの自覚と、夫の不実を非難する内容として詠まれる。そして、待つことへの希望が絶たれた時に、夫への非難の言葉は夫の不実に対する憤りへと向かってゆくのである。ここに、哀切の情を内実とする〈怨恨〉とは異なる、希望の絶たれた怨みの情が成立するのであり、当該二作品の娘子の怨恨の歌は、中国詩の〈棄婦〉に重なりながら、棄てられた女の怨みの情の中に展開した作品であった。それは待つ女の哀切の情による〈怨恨〉から逸脱した、〈棄婦〉という新たな主題の獲得であったのである。さらに、棄婦詩の多くが夫婦の関係を前提として成立していることからするならば、当該作品の男女の関係もまた夫婦の関係における怨みの情の中に成立したことが考えられ、そこにこれらの作品の〈由縁〉の理由が存在するものと思われる。『万葉集』の恋を主体とする曖昧な男女の関係から、夫婦という関係の中において獲得された、〈棄婦〉という主題によって夫婦の愛情の在り方を語る〈由縁〉の歌であり、そのような夫婦の悲劇を〈今物語り〉として伝えたものと考えられるのである。

第四章 「『係恋』をめぐる恋物語りの形成」では、「夫の君に恋ひたる歌」という同じ題詞を持つ巻十六の二作品（A三八二―一三・B三八五七）の左注に用いられた仏典語「係恋」から作品の形成を論じた。「係恋」の語は、「思慕、 $\square$ 愛着、 $\square$ 執着の三つの意味を見出すことができ、当該二作品の場合は $\square$ の愛着にその意味が求められる。ただし、仏典語 $\square$ の例は〈否定されるべき愛着〉として用いられるが、当該二作品においては〈肯定されるべき愛着〉として用いられている。それは当該二作品の題詞が「夫の君に恋ひたる歌」であるように、愛着である男女の恋を積極的に歌の主題とすることにおいて、男女の恋物語りが成立するのであるが、仏典語「係恋」とは対立する用法となる。このような用法の対立が起きる理由は、天平期の知識人たちの仏教理解が示すように、仏教への信仰としてではなく、むしろ仏教を十分に理解することにより、世俗的生き方の価値を見出し、それを肯定するという態度と等しいところにある。当該二作品があえて $\square$ の愛着の意味で「係恋」の語を用いたのは、仏教における〈否定されるべき愛着〉を、男女の愛情の肯定の中で描こうとしたためであると結論付けられる。仏典でも限定的な言葉である「係恋」の語が選択された理由は、その意味の二律背反性にあつたのである。それは当該作品の理解した仏教思想とその対立という関係にあつたことを物語っており、そのことよって当該二作品は、愛着の戒めを鏡として、男女のより激しい愛情を映し出したのだから。『万葉集』の恋物語りは、仏教思想との葛藤によって、男女の真の愛情に価値を見出す段階へと歩みを進めているのであり、当該二作品は、その新たな男女の愛情の在り方を示すための〈今物語り〉として位置付けられるのである。

第五章 「愚なる娘子と歌物語りの形成——『児部女王の嗤へる歌』をめぐって——」は、「児部女王の嗤へる歌」（三八二）とその左注をめぐって、女王が娘子を「愚」として「嗤

咲」することの意味と、仏典語「愚(人)」「嗤笑」の語例から当該作品の成立を考察した。当該左注には、娘子が二人の男に「誂へ」られたとあり、この物語りは二男一女型の妻争いを背景に持ちながら成立しているが、この娘子が一方の男を選択したことによって、従来の話型から逸脱しているといえる。しかも、娘子の選択は児部女王によって「愚」であるとして「嗤咲」される。この「嗤咲」は漢語の「嗤笑」と同義であり、「嗤咲」は仏典語に多く見られる。仏典語における「嗤笑」は、世間の常識から外れた、道理をわきまえない愚かしい行為に向けられる笑いであり、当該の児部女王も、彼女の常識からは考えられない選択をした娘子を「愚」であるとして「嗤咲」したのである。仏典において、この「愚」と「嗤笑」は一对の関係にあり、殊に『百喻経』には、「愚」である者の例話を「喻」として「嗤笑」する話を多く載せる。また、『万葉集』卷十六の能登国の歌(三八七八)の左注に、「愚人」と「喻」が結びついた例話が載る。当該作品(愚・嗤笑)と能登国の歌の左注(愚・喻)、そして『百喻経』の在り方を総合すると、『愚―嗤笑―喻』の連関性は切り離せないものである。それゆえ、当該作品の児部女王に「愚」として「嗤咲」される娘子の物語りも、ある「喻」を抱えているとみることができ。それは女性の結婚にまつわる教訓的例話としての「喻」であったと推測され、二人の男に求められた時には条件の良い男性を選ばないと、世間から「愚」なる女性として「嗤咲」されるのだという戒めの話としても存在し、当時もはやされた嗤笑歌の一つとして読み解くことも可能となるのである。この「喻」の在り方は、そのまま当該歌の〈由縁〉として捉えることができるであろう。この時の娘子の「愚」なる選択は、結婚に対する価値観に多様性の存在することを示しているのであり、外的条件に基づかない、真の愛情に価値を見出す女性の登場であるといえる。そしてこの娘子が自らの意志で「下姓媿士」を選択したことによって、女性が自らの意志で、自らの価値観によって人生を選択するという生き方を獲得しているという〈由縁〉としても、成立している可能性が考えられるのである。

以上の論考をとおしてみた時に、『万葉集』にあらわれる男女の恋と語りは、恋の中に真実の愛情を発見し、それこそを人間として生きる価値としたのだといえよう。その愛の獲得のために起こる事件や苦悩、あるいは葛藤や挫折こそが、『万葉集』が掬い取ろうとした人間の心の歴史であるといえる。